

2012年度日本記者クラブ賞・同特別賞 贈賞式受賞者のあいさつ

(会員懇親会 2012年5月28日)

【日本記者クラブ賞】

三陸被災者ルポ

萩尾信也 毎日新聞記者 あいさつ



怪しい者ではありません。

僕は人前で緊張するということがない人間だったのですが、多分人生で一番、緊張しているような気がします。一つは、ネクタイと「決まり」というのが僕は嫌いなのですが、きょうは新しいワイシャツと新しい靴を履いてきて、何かロープで縛られているような気がいたします。

このたびは、過分な賞をいただきまして、まことにありがとうございました。自分の筆力の至らなさと、身の丈というの自分なりに承知しているつもりであります。ですから、正直いいまして、今回の受賞は、いささか戸惑いを感じております。

「三陸物語」という記事を中心に賞をいただいたのですが、一つは、被災地はまだ続いていることもありますし、何よりも今回の受賞のもとになった「三陸物語」というのは、現地でいろんな方にお会いして、僕が根掘り葉掘り、何度も何度も通って、時には泊まり込んで、時には飯をいただきながら、時には避難所で同じ布団に枕を並べながら、いずれも男性ですが、お話を伺いました。

あの大きな衝撃をもたらした出来事を、薄皮をはぐように、「そのとき、どんな音がしましたか」「目には何が映っていましたか」「どんなにおいがしましたか」——その気持ちの中に、時には手を突っ込むようなまねをしながら、本当にしつこく、しつこく、おつき合いをいただいたような気がします。

ですから、今回の賞は、僕の中では、私自身がいただいたというよりも、被災地でいまも暮らしておられる方々、亡くなった方々、そして、彼らに気持ちを寄せている方々に贈られるものだと思っています。私はこうした人たちに、これをささげたいと思っています。

もう一つ、つけ加えさせてください。記者になって32年になりますが、最近、私は「絶滅危惧種」とか「放し飼い」と呼ばれているようです。記者クラブ賞という賞には似つかわしくないほどに、全く記者クラブと会社には寄りつかずに、好き勝手なことをしてまいりました。それを許してくれた毎日新聞という社と、同僚や先輩、それと私に成りかわって家を支えてくれた大黒柱のかみさんとか家族に、この場をおかりして、どさくさに紛れて、一度もお礼をいったことがないので、感謝を述べたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

今後も、毎日新聞に限らず、新聞社ともども、新聞業界ともども、よろしくお願いします。私も頑張ります。(拍手)

【日本記者クラブ賞特別賞】

福島第一原発水素爆発の瞬間を撮影・放送

福島中央テレビ報道制作局

代表 佐藤崇報道制作局長 あいさつ

きょうはどうもありがとうございます。

いま福島では、まだ 16 万人が警戒区域から、そして警戒区域の外から、圏外に避難生活を続けております。そういう状況ですので、きょう、このような立派な賞をいただきましても、喜びの言葉というのは、申しわけありません、出るはずもないです。ただ一つだけ、先ほどの贈賞で、「水素爆発の瞬間を撮影し放送した」といっていただきました。撮影をしただけではなくて、放送し、そして地元に伝えたということを評価いただいた、これは本当に私ども、うれしく思います。本当にありがとうございます。



この後、いろいろと（ポケットから紙を出しながら）書いてきたのですけれども、先ほど皆さんと話をしていたら、あの映像をどうやって撮ったのか、それを話せという話をいただきましたので、これはお蔵にということで……。

実は、カメラを据えつけたのは、東海村の J C O 事故があった 1999 年の翌年、2000 年ちょうどであります。場所は、第一原発から 17 km、第二原発から 13 km の山の中にあります。ですので今回、幸いとしまして被災は免れた。といいましても、実は被災もしているのですけれども、何とか動いたわけです。

ですが、そこには実は、「原発神話」に自分たちがはまっていたという教訓があります。何のことはないんです。私たちはデジタル化をした後、2008 年でしたか、第一原発から 3 km、第二原発から 2 km のところに、今度はハイビジョンのカメラをつけました。つまり、私たちは、J C O クラスの事故はあって避難をすることはあるても、原発が爆発するなんて、考えてもいなかったのです。ですから、完全に「安全神話」の中に入っていて、そこで原発から 2 km とか 3 km というカメラまでつけたんです。ですので、私たちが今回撮った映像が、「原発神話」云々といわれるような理由ではないのかもしれません。

ですが、一つほめてやってもいいのかなということがあります。2000 年にカメラをつけたときですが、このカメラはどう使ってもいいけれども——どう使ってもいいといいながらも、実は海しか写らないのですが——使ったら最後は、必ず第二原発でもない、第一原発に向けておけよ、老朽化が進んでいるのは第一だから、というルールをつくりました。

偉いのは、私たちではありません、先ほど吉田理事長がおっしゃった「現場」です。現場の人間がそれを 11 年間、守り続けたのです。技術屋さんであります、カメラ屋さんであります。まさに、彼らが、本当にひたすら、そのルールを守って、そこに置いてくれたからなのです。

今回、震災で地震があり、17 km 離れたカメラも、実は被災をしました。回線は通っていて映像は流れてくるのですが、コントロールがきかなくなりました。ですから、右に振ったり、左に振ったりもできなければ、原発にズームをすることもできない。それどころか、地震が起きるたびに、余震のたびに、ずれていくわけです。そして、一月もしないうちでしたでしょうか、実は、完全に第一原発がファインダーから外れてしまいました。そのときもまた頑張ったのは、技術屋

の現場の人間でした。防護服を着て、その鉄塔に上り、そしてカメラをもとに戻してきたのです。ですから、私たちはその必要性を認識して考えてはいたんですけども、やはり現場が頑張って撮った、ということになるかと思います。

もう一つだけ話をさせてください。あれを撮った瞬間ですが、実は、あの瞬間はだれも見ていません。私たちは津波被災により、その取材に追われていて、カメラは回していたけれども、その瞬間を、ずっと張りついて見ている人間はいませんでした。そんな中、ある人間が声を上げました。第一原発の1号機と北の5号機が煙に隠れて見えなくなっていました。「何が起きたんだ！」。

その瞬間はだれも見ていないわけですけれども、（撮影映像を）そのときに巻き戻して見たら、明らかに1号機の建屋がないのです。正直いって、体が震えました。あんなふうに簡単に、と思いました。

それ以上に、この周りには数万人の人間がいるんだ、あそこは原発を立地して、首都圏のための電源供給地だ、数万人の人間が生活しているんだ——いち早くそれだけを考えました。ですので、ジャーナリズムというのは、私たちには、今回、いまの（吉田理事長の）お話とは無縁かと思います。目の前で起きたこと、あったことをそのまま伝える以外、考えなかつたということあります。

ですが、1年たちまして実は、福島の中は、さらに複雑化しています。避難の問題もそうですし、補償の問題もそうです。何よりも、全国で早くも風化が進んでいます。これについては、私どもだけではなくて、宮城も岩手も同じようにつらい思いをしていると思います。

この賞をいただいたのを機に、さらに何とか地方のメディアは頑張ってまいりますので、できましたら、日本記者クラブの皆様の力をどうかかしてください。そして、風化を防いで、福島を、東北を助けてください。

どうもありがとうございます。（拍手）

【日本記者クラブ賞特別賞】

手書きの壁新聞

石巻日日新聞社

代表 武内宏之 常務取締役報道担当 あいさつ



緊張しております。宮城県は石巻市の小さな新聞社が、日本記者クラブのこの席に立つ、ましてや大先輩の前に立つことは考えられませんでした。

今回、特別賞をいただいたて、皆さんの前に立つことになりましたが、先ほど佐藤さんもおっしゃっていました。まだ石巻でも、失った家を建てずに仮設住宅で頑張っている市民の方、そして仕事を失った人も何とか手当でしのいでいる。そして、大切な人を失った方については、この1年2カ月余りの時間では、いやされるにはとても短過ぎます。被災地の中にいて、ちょっと震災のことを話すと、ぐっとあの日に戻っていってしまうというのも被災地の現状です。

今回、いただいた特別賞、そして、私たちがあのときに手がけた壁新聞……。ほんとにあのと

きは、私たちは追い込まれていました。そして、津波がおさまたた3月11日の夜8時ごろと記憶しておりますが、あしたからの新聞をどうする、というときに出たのが、戦時中の先輩たちの活動でした。一県一紙という統合政策の中で、当紙のほうは廃刊を迫られた。そして、やがては紙の配給が絶たれた。印刷による新聞はストップしたのです。先輩たちは、やむなくペンを置くというメッセージを読者に置いて、それでストップしてしまいました。

ただ、その後も、先輩の記者たちは家にあったわら半紙、模造紙に鉛筆で書いて、町内会に配っていたという伝説が、社内にあります。私が入社したときに、よく先輩たちから、酒が入るとその話を聞かされておりました。

そして、あの3月11日の夜。その話をしましたら、私たちの社長である近江が、「じゃ、先輩たちのように、ペンと紙さえあれば、自分たちの伝えるという仕事はできるんじゃないか」と。そして、手書きという活動に入りました。6日間、毎日6部ずつつくって、記者をはじめスタッフが、避難所に持つていっては張り出す。その繰り返しをやってきました。

壁新聞をつくった私たち、意外とこだわりがないんです。よく震災前も、私たちは新聞をつくって、読者の手に渡る、読者が読んだら「古新聞」という意識の中で、意外と、その手書きの方もそういう感覚であります。

ただ、その後、皆様からその活動に意義を見出していくだけということについては大変うれしく思います。

今回の特別賞についても、あの日から日日新聞はとにかく突っ走ってきました、そして1年2ヶ月たったこの時期に、スタッフに疲れがみえてきたときでした、そのときに、この特別賞をいただくということは、やはり地域で新聞を発行している人間としては、仲間から見守っていただいているという意識で、本当にうれしかったです。

石巻も、これから復興の本番を迎えると思いますが、私たちにとっても、これだけの災害は初めてですし、今後、どう地域報道をしていけばいいのか、暗中模索の中での活動になると思います。

今回の特別賞を、また被災地の地域の伝えるという力にしまして、新聞を出し続けることで地元の復興に貢献できればと思っております。

きょうは本当にありがとうございました。(拍手)

【贈賞の理由 受賞者・社の紹介】

日本記者クラブ賞

萩尾信也（はぎお・しんや）毎日新聞記者（東京本社社会部部長委員）

萩尾信也記者は東日本大震災の直後から、出身地でもある岩手県の三陸沿岸に住み込み、被災した人々に時間をかけてじっくり話を聞く長期現場取材をひとりで続けた。ひとりひとりのあの日のすさまじい体験。愛する家族を失った悲しみ。揺れ動く心と思い。そして生きる意味を見出す再生への過程。それらを綿密に記録し、方言を生かした印象深い文章で企画「三陸物語」を2011年5月から2012年3月まで201回連載した。

多くの記者が現地取材ルポを発表したが、中でも萩尾記者の仕事は出色であり、日本のメディアの大震災報道を代表する優れた記事である。大震災の年の日本記者クラブ賞に最もふさわしいと高く評価された。

萩尾信也記者 1955年6月長崎県生まれ。56歳。小学校3年から高校2年まで岩手県釜石市に在住。早稲田大学卒。1980年毎日新聞社入社。東京本社社会部、外信部、バンコク支局特派員、サンデー毎日編集次長などを経て、東京本社社会部部長委員。

連載企画「三陸物語」は2011年5月2日から毎日新聞に連載した。9月までの連載を「三陸物語 被災地で生きる人びとの記録」（毎日新聞社）として出版。

これまでの連載企画に「生きる者の記録」「がんを生きる 寄り添いびと」「ともに歩く目の探訪記」など。

日本記者クラブ賞特別賞 福島中央テレビ報道制作局

福島中央テレビ報道制作局は、東京電力福島第一原子力発電所事故で、2011年3月12日の1号機水素爆発の瞬間を世界のメディアで唯一、自社の監視カメラでとらえた。爆発の映像は4分後に緊急放送し、約1時間後にはキー局から全国放送された。当時、首相官邸は「白煙があがっている」という情報しかなく、1号機の状況を把握していなかった。爆発映像を見た福島県民は異常に気づいて避難を始め、政府は前例のない非常事態を初めて知った。また、3月14日の3号機水素爆発の映像も唯一、生中継で速報した。

まさに、衝撃の映像であり、原発神話の崩壊と日本の危機を映像で日本と世界にまざまざと示した。福島中央テレビは万が一の事態に備えて監視カメラを維持し、大震災のあと他社のカメラが機能を失う中、ただ一台、生き残るための努力を続けていた。

この映像がなければ、国民も政府も水素爆発を知らないまま危険な時間をいたずらに過ごす事態に陥りかねなかった。人々に事実を速報するというジャーナリズムの使命を果たし、国民の知る権利に応えた報道である。初めての日本記者クラブ賞特別賞にふさわしいと高く評価された。

福島中央テレビ報道制作局

福島中央テレビ（本社・福島県郡山市）は1970年開局。略称はFCT。日本テレビ系列。

<http://www.fct.co.jp/>

【写真】福島第一原発1号機の水素爆発の映像
福島中央テレビ提供



日本記者クラブ賞特別賞 石巻日日新聞（いしのまき ひび しんぶん）

石巻日日新聞は、東日本大震災の停電と津波で社屋が被災し、輪転機が水没して使えなくなった。「ペンと紙さえあれば」と新聞発行をあきらめず、手書きの壁新聞づくりを決断。記者が浸水した被災地を歩き取材した原稿を、油性ペンで新聞用ロール紙に書き込んだ。壁新聞は6枚作り、避難所6カ所に張り出した。3月12日から17日まで壁新聞の発行を続け、避難者に貴重な情報を提供した。

国内だけでなく世界にも大きな反響を呼び、米ワシントンの報道博物館、ニュージアムは壁新聞の現物を展示し、国際新聞編集者協会は特別賞を贈った。日本のジャーナリ

ズムが持つ気概と底力を地元の読者だけでなく、広く日本全国と世界に示した。

どんな苦境に追い詰められても、ニュースを発信し続けた記者魂は全国のジャーナリストにとって励みであり、誇りである。極限状況にもかかわらず、いや、むしろ極限状況だったからこそ、読者と深くつながるという新聞の原点に立ち返った。日本の報道史に残る壁新聞づくりであり、初めての日本記者クラブ賞特別賞にふさわしいと高く評価された。



石巻日日新聞

1912年創刊の夕刊紙。今年100周年を迎える。宮城県の石巻市、東松島市、女川町をエリアに発行。震災前の発行部数は1万4000部。

<http://www.hibishinbun.com/>

【写真】手作りの壁新聞と石巻日日新聞の記者
石巻日日新聞提供

【日本記者クラブ賞について】

日本記者クラブ賞は、千葉雄次郎氏（元日本新聞学会会長）が同クラブに贈った寄託金を基金として1972年、創設された。その後も、クラブへの寄付金を基金に積み増し、賞を運営している。報道・評論活動などを通じて顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた日本記者クラブ会員および法人会員社に属するジャーナリスト個人に贈る。今回の萩尾氏を含め、受賞者は計46人になる。

日本記者クラブ賞特別賞は、クラブ賞創設40年を機に、より開かれた賞をめざして新設された。原則としてクラブ会員以外の内外のジャーナリストやジャーナリズム活動に贈る。ジャーナリズムの向上と発展につながる特筆すべき業績や活動を毎年顕彰する。今回の福島中央テレビ報道制作局と石巻日日新聞が初めての特別賞となる。

いずれも日本のジャーナリズムの高い水準を示す表彰であり、日本記者クラブの公益目的事業のひとつである。

日本記者クラブ賞歴代受賞者一覧 <http://www.jnpc.or.jp/activities/award/awards-prize/>